

Tsukuba Global Science Week 2020 自由セッション

第 63 回 筑波大学人間系コロキウム

2020 年 9 月 29 日（火）15:00～17:00

学際的・国際的視点からみたダイバーシティとインクルージョン：

LGBTQ を巡る今日の課題に焦点を当てて

## 参加レポート

### 当日プログラム

15:05	開会挨拶 山口香（筑波大学 DAC センター副センター長）
15:05	話題提供 1 （15 分） 「働く LGBTQ の人々への暴力と SOGI ハラの実態」 大塚泰正（筑波大学人間系）
15:20	話題提供 2 （15 分） 「国内で生活する LGB のメンタルヘルスと当事者のアイデンティティについて」 佐藤洋輔（筑波大学人間系）
15:35	話題提供 3 （15 分） 「LGBTQ の認知特性に関する実験心理学的アプローチ」 小林麻衣子（早稲田大学理工学術院）
15:55	ディスカッション（60 分） モデレーター 土井裕人（筑波大学人文社会系） コメンテーター 徳永智子（筑波大学人間系） 松田壮一郎（筑波大学人間系）
16:55	閉会挨拶 小川園子（筑波大学人間系長）

司会／セッション・オーガナイザー：河野禎之（筑波大学人間系）

主催：筑波大学人間系

共催：筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター

## 話題提供の概要

3名の先生から話題提供がありました。まず大塚先生からは、職場におけるLGBTQ+への暴力やSOGIハラについての実態についてのお話がありました。次に佐藤先生からは、LGBのメンタルヘルスとアイデンティティについての話題で、当事者のポジティブなアイデンティティについてのお話もありました。最後に小林先生からは、実験心理学的アプローチを用いた、LGBTQの認知特性やジェンダーステレオタイプの発達についての研究のお話がありました。

## 話題への感想

大塚先生の話題提供に関して、依然としてSOGIハラなどがあるという現実にはショックを受けました。しかし、こういった調査がされるようになったというだけでも、少しずつ理解が進んでいるのかなと思いました。

佐藤先生の話題提供に関して、LGBは社会とのかかわりの中でマイノリティ・ストレスなどにさらされて、メンタルヘルスに問題を抱えることもあるのだとわかりました。アイデンティティの受容に関して、特に悩みを抱えていそうな中高生を対象とした調査や支援はどのようなものがあるのかと興味を持ちました。

小林先生の話題提供に関して、LGBTQに関する研究は調査が多いイメージなので、実験を行っているところが興味深く思いました。今回は認知特性に関する異性愛者と非異性愛者の比較でしたが、非異性愛者の中でもより細かい分類がされた結果も見たいです。

全体として、先生方も指摘されていましたが、海外に比べて日本の研究は少ないというのが気になりました。問題や課題に焦点を当てた研究だけでなく、ポジティブな研究も含め、より多くの研究がされたいと思いました。

## ディスカッションの概要

ディスカッション部分はモデレータの土井先生がLGBTQをめぐる状況についての課題を5つ提示したのち、一般参加者からの質問を取り入れながら進行しました。

課題① 様々な側面からの調査が進む中で、個別的な状況に対応できるアプローチを組み立てるには？

全体的な統計の傾向だけでなく個別的な要素も提示すべきであるという意見と、公表するデータを増やすことで「不確実性の恐怖」の低減が期待できるという意見が出ました。

課題② ジェンダーバイアスに関して

ビデオ会議などでは見た目や名前が変更可能だという話題がありました。また、「彼」や「彼女」、「Mr.」や「Miss.」等の呼称についても、自分が使ってほしい呼称を表明することができる環境が必要なのではといった意見が出されました。

課題③ セクシュアル・マイノリティと発達障害の重複について

複層的なマイノリティへの支援という観点で、2つのマイノリティ性のどちらにも理解のある支援者を養成すること、異なる支援組織間の連携をとることの重要性と困難さが指摘されました。支援に向けて

の案としては分かりやすい用語を使うこと、大学の部門間の連携や支援体制の組み替えなどが挙げられました。

#### 課題④ 「呪いを解く」手法をどう開発するか？

セクシュアル・マイノリティというカテゴリを当事者が意識すること、また個々のセクシュアリティをアイデンティティとすることのポジティブな側面とネガティブな側面についてそれぞれの立場からのお話がありました。また、自分の力で支援を受けたり知識をつけたりすることが困難な未成年への支援について、既存の教員への研修、教員養成過程での教育、教科書や学習指導要領などの政治的な側面の3つの観点で議論されました。

イベントの最後にそれぞれの先生から今後の支援のあるべき姿について、研究者だけでなく当事者の周囲の人がセクシュアル・マイノリティは当たり前の存在であるという意識を持ち、過剰な配慮ではなく当事者の意に沿う支援ができるように教育や啓発活動、環境づくりを行っていききたいと表明されました。

#### ディスカッションの感想

セクシュアル・マイノリティをセクシュアル・マイノリティとしてカテゴライズすること、またその中でさらに細かく分類することのデメリットと、それを分かったうえで研究としてはそうせざるをえないという葛藤がよく分かりました。セクシュアル・マイノリティを分類したり分類を意識させたりしないようなやり方の支援は、セクシュアル・マイノリティに関する大学等のサークルや当事者団体などのような非専門家の支援団体がやるべきなのかもしれないと思いました。一方で、当事者が別の当事者を支援するような状況では経験に基づく偏った知識や内在化されたステレオタイプによって適切な対応ができない可能性も考えられます。研究に基づく客観的な知見と、統計では拾いきれない個別具体的な経験や感情の両方にアクセスできるよう、どちらもまずは発信する量を増やしていく必要があると思いました。

また、「セクシュアル・マイノリティは当たり前に存在するもの」ということについてはこれまで多くの当事者や支援者、活動家が主張してきたことだと思いますが、それにもかかわらずまだ一般にそう認識されていないということは単に人数や割合を示すようなやり方では効果がないのではないのでしょうか。研究者のあげる成果を期待するとともに、自分にできることも考えていきたいです。